

インド密教とマンダラ

大正大学講師・真言宗豊山派南蔵院住職
野口圭也

第1回 インド密教密教經典の分類

はじめに

今月より約一年間の予定で、インド密教の教理に基づいて造られたマンダラについて解説してゆきます。マンダラの解説書は数多く出版されていますが、取り上げる視点も様々です。このシリーズでは、インド密教の思想に基づいてマンダラの思想的な意味を論じてみたいと思います。

私はインド密教の教理と実践の体系についての研究を行ってきましたが、その中で「マンダラはなぜマンダラであるのか」という疑問が生じてきました。単にほとけがたくさん描かれている絵とマンダラとは、何が違うのか。何をもちマンダラがマンダラとして成立するのか。なぜ多数のマンダラが存在するのか。そのような疑問に対して、自分なりにこれまで考察してきた事をここで述べてゆきます。一般に説明されていることとは少し異なる見解も含まれていることを予めご承知下さい。

マンダラを思想的に理解する上での契機となる、いくつかのポイントを上げてみます。

- ①マンダラは日本製か中国製かインド製かチベット製か
- ②マンダラは丸いのか四角いのか
- ③マンダラは平面か立体か
- ④マンダラは動いているのか静止しているのか
- ⑤マンダラの形は真実か虚偽か
- ⑥マンダラは何のために作られるのか
- ⑦マンダラがマンダラとして成立する根拠は何であるのか

今回はまず、①のポイントを取り上げます。現在、私たちが眼にすることができるマンダラは、日本製またはチベット製、もしくはネパール製のものがほとんどです。マンダラを作るための大元となる經典はインドで成立したものですが、インドで作られたマンダラは、残念ながら図画のものは遺っていません。しかしインド仏教の最終段階までが直接伝わったチベットやネパールでは、様々なマンダラが描かれましたし、今日でも制作されています。一方、日本に本格的なマンダラをもたらしたのは、真言宗を開いた弘法大師空海ですが、これは中国で制作されたマンダラでした。真言宗では、それを元にして転写されたマンダラが継承されてゆきました。

ではインド密教經典にはどのようなものがあるのか、それを見てゆきましょう。

I. インド密教經典の分類

I-1. 密教 = 真言理趣

弘法大師空海は日本に密教を広めるに当たり、それまでの仏教を顯教、自分が唐からもたらした新しい教理と実践の体系を密教と名付けました。11世紀のインド密教の学匠であるアドヴァヤヴァジュラは、大乘仏教を「波羅蜜多理趣 (pAramitAnaya、顯教に相当)」と「真言理趣 (mantranaya、密教)」の二種に分けています。

「理趣(naya)」とは「やり方・方法論」を意味するサンスクリット語です。したがって「波羅蜜多理趣」とは「波羅蜜多のやり方」、「真言理趣」とは「真言のやり方」ということとなります。「波羅蜜多」とは大乗仏教の実践である布施・持戒・忍辱・精進・^{ぜんじょう}禅定・智慧の六波羅蜜多を意味します。アドヴァヤヴァジュラによれば、顕教と密教の相違は、悟りに到達するための実践方法の違い（非常に長い時間に亘る六波羅蜜多の実修か、真言という象徴言語を用いるか）、ということとなります。

I-2. インド密教経典の四分類法

マンダラは基本的には密教経典に基づいて作られます。密教経典は元は古代インド言語であるサンスクリット語によって書かれていました。それらの経典の多くにマンダラが説かれています。経典ごとにマンダラが存在する、と言っても過言ではありません。一つの経典に複数のマンダラが説かれることも多いので、経典の数よりもマンダラの数の方が多く、ということもできます。今日までに多くのサンスクリット語の経典が失われてしまいましたが、多数の経典が漢訳やチベット語訳で遺されています。

普通の経典が「アーガマ (阿含 Agama)」あるいは「スートラ (経 sUtra)」と呼ばれるのに対し、密教経典は「タントラ (tantra)」と総称されます。これは「横糸」を意味します。中には、経典自身に記された題名が「大乘経典 (mahAyAnasUtra)」と自ら称している密教経典もあります。密教経典を作り出し、それを実践していた人たちは、自分たちの行っているのが大乗仏教である、との意識を持っていたことが理解されます。

密教経典は、他の経典と同じく、インドで一度に成立したのではありません。およそ5～6世紀ころからインド密教史の最後（それはまたインド仏教史の最後でもあります）に近い10世紀末から11世紀初頭に至るまで、発展と変化を遂げながら多数の密教経典が作られてゆきました。それらの経典を分類整理する試みが、すでにインドにおいてもなされていますが、今日よく用いられるのは14世紀に活躍したチベット密教の巨匠、プトゥン・リンチェントゥブ (Bu ston rin chen grub) による以下の四分類法です。これは密教経典の発展段階に対応し、四分類の名称が各段階の特徴をよく表しています。

- (1) ^{しよさ}所作タントラ：^{ぎさ}陀羅尼・^{くじゃくおうじゆ}儀軌類。『^{ふくうけんざくじんべん}孔雀王呪経』、『不空罽索神変真言経』など
- (2) 行タントラ：『大日経』（7世紀中頃成立）
- (3) ^{ゆが}瑜伽タントラ：『^{あくしゆしよじよ}金剛頂経』（7世紀後半成立）、『理趣経』、『悪趣清浄タントラ』など
- (4) ^{しゆえ}無上瑜伽タントラ 『^{しゆえ}秘密集会タントラ』と『^{しゆえ}へーヴァジュラタントラ』は漢訳あり
 - ① ^{ちち}父タントラ：『秘密集会タントラ』（8世紀後半成立）、『黒ヤマーリタントラ』など
 - ② ^{はは}母タントラ：『へーヴァジュラタントラ』（8世紀末から9世紀初）、『チャクラサンヴァラタントラ』、『サンプタタントラ』など
 - ③ ^{そうにゆうふに}双入不二タントラ：『^{じりん}時輪タントラ』（11世紀） ※インド仏教の滅亡は1203年

この分類はほぼ、密教経典の発展段階と年代順に対応しています。(1)が初期密教、(2)・(3)が中期密教、(4)が後期密教に、ほぼ相当します。中国では、(4)の経典はほとんど漢訳されず、日本に入って来たのも(3)の段階までです。それに対しチベットには、(4)の最終段階まですべてが伝えられ、チベット語に翻訳されました。